

長寿の表現史 「菖蒲・あやめ草」をめぐって

The Literary Traditions in Symbolizing Long Life - - “Shoubu” and “Ayamegusa” - -

亀 田 夕 佳

はじめに

長寿をめぐる表現史をたどることによって、日本の古典文学の表現が、いかに大陸からの恩恵を受け、それらを自国のものとして変容させていったのかを考察するのが本論の目的である。

一、五月節の「菖蒲・あやめ草」

日本では五月の節句に菖蒲が欠かせないものになっているが、その始発は中国に倣ったものであった。まず大陸における「菖蒲」と五月節とのかかわりを確認しておく。文学類書である『芸文類聚¹』には次のようにある。

卷四「五月五日」

風俗通曰 五月五日以五綵絲繫臂者 避兵及鬼令人不病温亦因屈原

又曰 五月五日續命縷俗説以益人命

荆楚記曰 荆楚人以五月五日並鬪百草採艾以為人懸門戸上禳毒氣

中国では五月は忌月とされ、特に端午は避邪除災の行事が集中する節日であり、五色の糸や蓬・梅檀など香りの強い植物を魔よけの佩物として身につけたことが『歳時広記』をはじめ、多くの文献に記されている²。上の「續命縷」はそれら佩物の代表的な名称である。また「荆楚記」とあるのは、『荆楚歳時記』のことであるが、次のように記されていた。

五月五日、謂之浴蘭節。四民並 _ 百草戲、採艾以為人、懸門戸上、以禳毒氣。以菖蒲或纒或屑、以泛酒以避邪氣。³

(五月五日、之を浴蘭節と謂う。四民並びに百草を踏む、また百草を闘はすの戲あり。艾を採りて人形に為り、門戸の上に懸け以て毒氣を禳い、菖蒲を以て或は纒め、或は屑として以て酒に泛ぶ。)

上にいう「菖蒲酒」は近年まで長野県の諏訪地方では一般的な風習として行われていたことが知られる⁴。「菖蒲」は「百草に先んじて生ず⁵」とあるように、精気の強い植物であった。その効果として「益人命」、「禳毒氣」ということがあり、邪気を祓う植物として五月五日の節日と深く結びついたのでといえよう⁶。

日本の年中行事の成立は、中国から渡来したもの、日本の民間の風習が宮廷に入ったもの、それら二つの要素が混合したものに大別できるが⁷、五月五日の節会については、『令』に「五月五日為節日」と規定されており、節日の中でも古くから存在するものである。十世紀の明法博士である惟宗公方の『本朝月令』には、「五日節会事」として次のようにあり、中国の伝統と分かちがたく結びついていたことが知られる。

荆楚記云。民斬新竹筍為首櫻、棟葉挿頭五綵纒投江、以為避火厄。士女或取棟葉挿頭、綵絲総繫臂、謂為長命。皆連棟葉之玉並莖黏。裏印投羅水之中祭之、天下無災。此日棟葉置井中、而亥時取出治置。治虐疫者、繫頸即差止。⁸

日本における五月節会の最も古い記録は、『続日本紀』巻十七、天平十九年の元正天皇の詔にみることができる。

昔者、五日之節、常用菖蒲為纒、比来、已停此事、從今而後、非菖蒲纒者、勿入宮中⁹

右の記述から、当時行われなくなっていた菖蒲纒を復興したことが知られる。ただし、菖蒲を「纒」にすることは中国の文献には見出すことができず、「菖蒲纒の方は日本固有の習俗らしい¹⁰」とされている。中国では「佩物」であっ

た菖蒲を「縵」にしたのは、『古今要覧』が「時の疫邪悪気などをさけたためにせしめたまふ也¹¹」というように、菖蒲が災いを除く植物として捉えられていたためだと考えられる。久徳高文氏が、「元来中国の風習なのである。香気の拡散によって魔除けの呪とするわけであるが、舶載珍奇の香料に加えて、身に生い茂る手ごろな香草香花を貫き通して一層その呪力を高めることになる。縵もまた同じような考え方の基盤に立ち、香気の手による災厄消除の祈りを籠めるものである。」と指摘するように、五月節の「菖蒲・あやめ草」は、花を愛でる「花しょうぶ」ではなく、葉に芳香のあるサトイモ科の植物であると結論づけている。¹²

『万葉集』には「菖蒲・あやめ草」を詠み込んだ歌は長歌七首、短歌五首の計12首あるが、全て「かつら」や薬玉など五月節との関わりにおいて詠まれている。次にいくつかを示す¹³。

- 0423 ~ほととぎす 鳴く五月には 菖蒲 花橋を 玉にぬき 縵にせむと~
(山前王)
- 1490 ほととぎす 待てど来鳴かぬ 菖蒲草 玉にぬく日を いまだ遠みか
(大伴家持)
- 4089 ~卯の花の 咲く月たてば めづらしく 鳴くほととぎす あやめぐさ たまぬくまでにひるくらし~ (大伴家持)
- 4101 ~なげくらむ 心なぐさに ほととぎす 来鳴く五月の あやめぐさ 花橋に ぬきまじへ かつらにせよと 包みてやらむ~
(大伴家持)
- 4102 白玉を 包みてやらば あやめ草 花橋に あへもぬくがね
(大伴家持)
- 4116 ~ほととぎす 来鳴く五月の あやめ草 蓬かつらぎ さかみずき~
(大伴家持)
- 4166 ~夜ごもりに 鳴くほととぎす いにしへゆ 語り継ぎつる 鶯の

うつしまこかも 菖蒲 花橘を 少女らが 玉ぬくまでに ~
 (大伴家持)

4175 ほととぎす 今そ来鳴きむ 菖蒲 かづらくまでに かかる日あ
 らめや (大伴家持)

4177 ~はるし過ぐれば ほととぎす いやしき鳴きぬ 一人のみ 聞けば
 さぶしも 君とあれと 隔てて恋ふる となみ山 飛び越えゆきて
 明けたてば 松のさ枝に 夕さらば 月に向かひて 菖蒲 玉ぬ
 くまでに 鳴きとよめ~ (大伴家持)

上の傍線部に示したように、「菖蒲・あやめ草」が取り上げられる場合、しばしば「玉にぬく」「花橘にぬく」という表現を伴うが、これは香の高い草花で作った「薬玉」のことである。『万葉集』にみられる「あやめ草」の特徴は、薬玉やかづらなど五月節にまつわる所で「邪を除く」ものとしてよまれている点である。

後の時代において「菖蒲・あやめ草」は「根」が「音」に転じて「泣く」「鳴く」を導き出すことも多かった¹⁴とされるが、『万葉集』における「菖蒲・あやめ草」は、「根」や「音」との結びつきが果たされる段階には至っていない。後代、「根」に関心が集中する「菖蒲・あやめ草」であるが、大陸の影響下にある五月節の場面においては、述べたように、香りが高く薬玉やかづらに用いられる「葉」を愛でるものであったのだといえる。後に触れるが、菖蒲・あやめ草の「根」への関心は日本独自の展開なのである。

二、< 霊草 > としての「菖蒲・あやめ草」

大陸と日本において、菖蒲・あやめ草が五月節を象徴する「避邪」の植物であることを述べたが、そのような植物として認識された理由として、菖蒲・あやめ草が不老長寿をもたらす「霊草」として捉えられていたことが考えられるだろう。先にも示した『芸文類聚』には次のようにあった。

卷八十一「菖蒲」

抱朴子曰 韓終服菖蒲十三年身生毛

神仙伝曰 王興者陽城人漢武帝上嵩高忽見有仙人長二丈耳出頭下重肩
帝禮而問之 仙人曰吾九疑人也聞中嶽有石上菖蒲一寸九節
食之可以長生故來採之 忽然不見

『抱朴子』の記述は「内篇」の「仙薬」の項に収められている。「仙薬」とは不老不死をもたらすとされる「養命の上薬」のことであり、古代中国においては「不老不死・不老長生」のためにさまざまな方策がとられていた¹⁵。また『神仙伝』にあるのは、「王興」篇だが、漢の武帝が嵩山に登り、潔斎して神に祈念させたところ、仙人が忽然と現れた際の逸話である。上の傍線部は武帝の問いに対して仙人が答えた言葉の一部であるが、「石上のある菖蒲は一寸九節で、これを服用すれば長生できると聞いたので採りに来たのだ」というなり忽然と消えたという。「菖蒲」は本来ありえないような効果をもたらす仙薬でもあったことがわかる。

「菖蒲」が不老長寿の薬草として認識されていたことを確認した。このことは、『万葉集』や勅撰和歌集にはみることができなかったが、いくつかの日本の詩歌に見出すことができた。『新撰万葉集』には次のようにある。

菖蒲草、五十人沓之五月、逢沼濫、毎来年、稚見湯禮者（61）（あやめ草いくつかのさつき逢ひぬらむ来る年ごとにわかみゆれば¹⁶）

五月菖蒲素得名 五月の菖蒲素より名を得たり（62）

每逢五日是成靈 五日に逢ふ毎に是れ靈と成る

年々服者齡還幼 年々服する者 齡幼きに還り

扁鵲嘗來味尚平 扁鵲嘗め來たらば味すら尚ほ平らかならん

漢詩の結句にある「扁鵲」は、起死回生の術を操ることができるとされた戦国時代の名医である。そして、彼の名を引き合いに出していることから、上の（61）の「菖蒲」は、先にみた神仙伝などにしばしば登場する「靈草」だとす

る指摘がある¹⁷。歌を漢字によって表記し、かつ七言絶句の漢詩を並置するという、独特のスタイルを持つ『新撰万葉集』において、「その詩は歌にはない状況説明的な表現を持ち、具体的で視覚的な場面を形成している」という¹⁸。即ち、右に挙げた「あやめ草」の和歌は中国的な「不老長寿」の発想に根ざすものだったといえる。「菖蒲・あやめ草」の若返りの力を漢詩では「齡還幼」、和歌では「毎来年、稚見湯禮者」と表現しているのである。そして、興味深いのは『新撰万葉集』に収められているもう一組の詩歌にも仙人が服する「靈草」の面影がみとめられることである。

賓広野邊之側之菖蒲草香緒不飽砥哉鶴歟音為（55）

（さつきまつ野辺のほとりのあやめ草かを飽かずとやたづがこ糸する）

菖蒲一種満洲中	菖蒲の一種洲中に満つ
五月尤繁魚鼈通	五月尤も繁うして魚鼈通ず
盛夏芬々漁夫翫	盛夏芬々として漁夫翫ぶ
栖来鶴翔叫無窮	栖来鶴翔りて叫ぶこと窮まり無し

五月には水辺に菖蒲が生茂り、魚などの生き物がその間を行ったり来たりしている。夏の盛りで、あたりは菖蒲の芳しい香に満ちている。漁夫は船を進めながらその菖蒲の香を嗅ぎ多くの魚の集まっていることを楽しんでいる。水沢をすみかとする鶴も菖蒲の香を愛でているのか、その上を飛び回ってしきりに鳴き声をあげている。

上の詩歌における「菖蒲・あやめ草」は五月節の場合と同様に高い「香」を放つものとしてよまれているが、『文選』に収められている司馬相如の「子虚賦」には「蕙圃（香草の茂る園）」の説明として次のようにある。

其東則有蕙圃、衝蘭芷若、穹翳菖蒲、江蘼靡蕪、諸柘巴苴。¹⁹

その東には則ち蕙圃有りて、衝・蘭・芷・若、穹翳・菖蒲、江蘼・靡蕪、諸柘・巴苴あり。

ここに示されている植物は、中国最古の薬物・博物学のテキストである『神

『農本草経』や先述『神仙伝』の「仙薬」で説明されているものと共通している。また、「鶴」は「仙禽／仙客」などの異名を持ち、「龍」と同様に、仙人が飛翔するときに乗る動物である²⁰。したがってここに描かれている「菖蒲・あやめ草」にも、仙人が服用する「霊草」のおもかげを認めることができると考えたい²¹。何よりも洲中に充ちる香や集まってきている魚に加えて「芬々」と表現される盛夏の様子は、生命力に満ち溢れた描写として成功をおさめている。

ここまで、不老長寿の仙薬としての「菖蒲・あやめ草」についてたどってきたが、「不老不死、または若返りの薬としての菖蒲のイメージは、和歌の本流には、適切な題材として受け入れられなかったのである。²²」とされるように、このような趣向は時代が進むにつれ文学作品には見られなくなっていく運命にあった。

例えば、万寿二年五月五日に行われた『東宮学士義忠歌合』では、「若さ」を回復する薬という意味ではなく、「千歳あるべき」薬として詠まれ、「長き根」が取り上げられるに至っている。

左勝 谷中菖蒲

谷深み たづねてぞ引く あやめ草 千歳あるべき 薬と思へば

右

谷深み 生ふるあやめの 長き根は 引きかつ人も あらじと思ふな

判詞 このふしの菖蒲の生ひたる谷のうちの石の上に、年毎の今日、人々あつまりつつ菖蒲の根を取りて薬とすれば、その水の心をくみてぞ詠むべきを、右のうたおもては、まれに見る人もやあらん、題の心をば知らず、根の長さをのみ引きたれば、まくるをふかきにやとぞ。

ここでの「菖蒲・あやめ草」は「千歳」の「薬」とよまれる点において、かろうじて「霊草」のイメージから認めることができると思われるが、同じ歌を採録した『夫木和歌抄』では「あやめ草」から「ちとせ」へという発想の連続

性について疑いがさしはさまれている。次に示す。

万寿二年五月五日義忠朝臣家歌合、谷中菖蒲 読人不知

谷ふかみたづねてぞひくあやめぐさちとせすぐべきくすりとおもへば

此歌判者云、九節の菖蒲のおひたる谷の内の石の上に、年ごとに今日人あつまりつつ菖蒲のねをくすりとすれば、その水のころをみてぞよむべき、左の歌すがた、ちとせとさしたるところは、あやめぐさのあやめなけれど、くすりのみちばかりはふかくはおもひよりたりと云云

『夫木和歌抄』が編纂された段階において、「ちとせ」という言葉は「あやめ草」の本来のよみぶりではないとされている。すなわちここにおいて、「あやめ草」は「ちとせ」との連想のもとに捉える感覚は錯綜するにいたっている。『新撰万葉集』でうたわれた「菖蒲・あやめ草」の「不老の生命力」をたぐりよせるものではなくなったのである。代わりに「根」に対する関心が浮上してくる。

日本の平安時代から中世への移行にあって「不老不死・不老長生」の思想が根付かなかったことについて、井上満郎氏は、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』などの説話における仙人の描かれかたの移り変わりを追った上で、次のように述べる。

時代が古代の終わりへと近くなってくると、忘れさられたわけではないが、不老不死・長生への希求は薄れてくる。仏教・儒教ないし神道がその境地を深めていくのに対し、道教ないし神仙思想はその動きから取り残されていく。やはり教団や教義を持たなかったことが、決定的な原因となったのである²³。

井上氏は続いて「不老不死・長生、また仙人への憧憬などがどうして古代で終わるのかは、中世に属する課題である。」とされる。確かに、教義として体系化されることがなかった点は、神仙思想が永続するにあたってはマイナス要因であろう。だが問題は、そのような状況を招いた人々の心の動きに求められる。

「菖蒲・あやめ草」が道教的な「不老不死・不老長生」の植物として認めら

れなくなる原因としては、五月節の廃絶の影響により、実体的な植物としての「菖蒲・あやめ草」に関心がもたれなくなったことに加えて、それまであまり目にすることのなかった「菊」が前栽などに取り入れられることが流行し、より身近な長寿の植物として人々の間に広まったことも理由として考えられるのかもしれない。しかし、何よりもその「菖蒲・あやめ草」自体の捉えかたの変化にこそ答えが見出されなければならないだろう。人々の心は言葉により決定されるのだから。

繰り返してきたが、「菖蒲・あやめ草」の日本的な展開は「根」に関心を向けたことにあった。

三、<根長き>植物としての「菖蒲・あやめ草」

中国大陸にあっては避邪の植物であり、不老不死の仙薬として、瑞々しい「葉」に関心が向けられることの多かった「菖蒲・あやめ草」であるが、日本においては「根」が注目されるようになる。日本における「根」の関心が象徴的に示される事例として「根合」という行事が挙げられるが、この行事の特異性について、三谷栄一氏は次のように述べる。

王朝時代の女房達の好んだ遊びに、五月五日に行われる根合なる物合の一種がある。こともあろうに菖蒲の根の長いのを比較してその長短をくらべ、勝敗を決する遊びであるが、美しい花ならばともかく、美しくもない菖蒲の根を、しかもその長さをなぜ比べて勝敗を決しようとするのであろうか²⁴。

三谷氏が「美しくない」と指摘するように「菖蒲・あやめ草」はサトイモ科の植物であり、その根はごつごつとした塊から幾筋かの根が生えており、相当にグロテスクな物体である。人々は何故そのようなものを愛でたのか²⁵。歌ことばの表現を問題とするところから考えてゆくが、まず「根合」において「菖蒲・あやめ草」がどのように表現されたのかを確認しておく。

根合の行事が行われたことが史料として判明しているのは四度ある²⁶。また、物語では永承六年の根合を描いた『栄華物語』、『堤中納言物語』の「逢坂越えぬ権中納言」にも取り上げられている。それら「根合」における和歌の共通性は、基本的に「長い根」によそえて「長命」をことほぐ性格を有する点だといえる。次にいくつかを示す。

根合はてて、歌の折になりぬ。左の講師左中弁、右のは四位少将、読みあぐるほど、小宰相の君など、いかに心つくすらむと見えたり。「四位少将、いかに、臆すや」とあいなう、中納言後見たまふほど、ねたげなり。

左

君が代のながきためしにあやめ草千ちろにあまる根をぞ引きつる

右

なべてのと誰か見るべきあやめ草安積の沼の根にこそありけれ
とのたまへば、少将、「さらに劣らじを」とて、

いづれともいかがわくべきあやめ草おなじよどのにおふる根なれば
とのたまふほどに、上聞かせたまひて、ゆかしうおぼしめさるれば、忍びかにてたまへり。

上の引用は、『堤中納言物語』「逢坂越えぬ権中納言」からのものであるが、ここで注目しておきたいのは、一首目の歌の性格である。片桐洋一氏は後の二首と当該歌との質の差について早くから言及しており、一首目を正式の歌合歌とし、後の二首は左右それぞれの方人からの応援歌であるとしていた。一首目の「君が代の」の歌はこの根合の主催者の長寿繁栄を「千尋にあまる」という菖蒲の根の長さに喩えたものであり、「慶賀」の心がより強く表れたものだといえる。

「根合」の和歌が「長命」を寿ぐ性格のものであったことは永承六年五月の「内裏根合」、寛治七年五月「郁芳門院根合」の歌にも認めることができる。

永承六年「内裏根合」 菖蒲 左 持 左馬頭経信

よろづよにかはらぬものはさみだれのしづくにかほるあやめなりけり (1)

右 右兵衛佐信房

つくまへのそこのふかさをよそながらひけるあやめのねにてしるかな (2)

寛治七年五月「郁芳門院根合」 一番 左 持 左少将忠教

ながき根ぞはるかに見ゆるあやめ草ひくべき数を千歳とおもへば (1)

右 右中弁師頼朝臣

たづのゐるいはかきぬまのあやめ草千代までひかむ君がためしに (2)

左 二位宰相中将雅美

あやめぐさひくてもたゆくながきねのいかであさかのぬまにおひけむ (3)

右 掌侍

君がよのながきためしにひけとてやよどのあやめのねざしそめけむ (4)

右の4番歌はまさに「逢坂越えぬ権中納言」の「君が代の」の歌を踏まえて
いると思われる。判詞には「判者被申云、左方ハ歌体頗有一興、右方△事已寄祝、
為持、有何難哉。」とあり、長い根をよむことが予祝の意味をもつものであった。
「菖蒲・あやめ草」の根はその長さに命長くあるように、との願いを込められ
るものであった。このような長寿の表現は、中国の五月節や靈草にも見られる
ものであったが、ことさらに「根」を取り上げた点が日本独自の表現生成なの
だといえる。

「長寿」を表す「あやめ草」は、「あやめ草」の和歌全体の総数からすると決
して多くはない。だが、問題はそれがどのような位置づけになるのかというこ
とである。新編国歌大観によると、「あやめ草」が詠みこまれた歌は千余首あ
るが、時代ごとの内訳を示すと次のようになる。

奈良 (1 2 / 1 2 6 7 7)

平安 (5 1 8 / 2 1 6 6 0 1)

鎌倉 (3 6 7 / 4 2 8 4 8 7)

室町 (7 0 / 1 2 3 5 5 9)

安土桃山（ 1 / 5 4 0 7 ）

江戸（ 8 5 / 1 1 7 9 8 2 ）

奈良時代はすべて万葉集の用例である。奈良から平安にかけて飛躍的に歌数が増えている点が注目される。なぜ平安時代に「あやめ草」の歌がこれほど増えるのか。それは、この時代に「あやめ草」をめぐる歌ことばの表現がより多くのことがらを表現しうるものになったためである。そして、その契機は「あやめ草」の「根」が表現として発見されたことに一因を求めることができるだろう。先に触れたが、『万葉集』の「菖蒲・あやめ草」は、薬玉やかづらといった邪を除くものとして固定的に用いられていた。『万葉集』での「菖蒲・あやめ草」に重要なのは、香の強い青々とした「葉」であり、「根」などは必要なかったのである。

長寿の証として、「菖蒲・あやめ草」の〈長い根〉が注目されたことにより、「根／音／泣く」や「根／流れ／泣かれ」「根／寝」「根／引く／こひぢ／恋路」といった、多岐にわたる表現の世界が拓かれ、平安時代の「菖蒲・あやめ草」をめぐる歌ことばの世界は確実に豊かなものになった。先に「根合」について述べたが、「根」は人々をさまざまな表現の世界へと誘うアイテムだったのであり、目の前のグロテスクな姿の向こう側に広がる歌ことばの世界との戯れや遊びが、「根」を愛づる心性を育てたのではないだろうか。そして、同時にその一方で「菖蒲・あやめ草」が本来示していた「不老長生」のイメージは薄められていってしまったのである。次に示すように、長寿の根を詠んだ「あやめ草」の歌は、限られた数であるが、これらの歌がなければ、「根」の世界は開かれなかったはずだ。

『古今六帖』 第一 あやめぐさ つらゆき

あやめ草いくよのさ月あひぬらんくる年ごとにわかく見えつつ（ 1 0 4 ）

『貫之集』

1 3 1 番歌 あやめ草根長き命つげはこそ今日としなれば人のひくらめ

2 2 7 番歌 あやめ草ねながきとれば沢水の深き心はしりぬべらなり

4 0 2 番歌 五月てふ五月にあへるあやめ草むべも根長く生ひそめにけり

5 0 9 番歌 五月雨にあひくることはあやめ草根長き命あればなりけり

5 2 8 番歌 年ごとに今日にしあへばあやめ草むべも根長く生ひそめにけり

『齋宮女御集』

ことしおひのみかはのいけのあやめぐさながきためしに人のひかなむ(1 2 8)

『能宣集』

ちよよさすみぎはのたづもとしごとにけふのあやめはかみにとぞおも(3 6 9)

『実方集』

いはのうへのあやめやちよをかさぬらむけふもさつきのいつかとおもへば(2 8 3)

『公任集』

命をぞつぐといふなるいときなき袂にかかるけふのあやめか(6 9)

一見して貫之に多いのがわかる。「あやめ草 / 根 / 長き / 命」といった言葉の結びつきを果たしたのは貫之だったといえるのかもしれない。貫之が漢詩文とのせめぎあいの中に和歌の表現を打ち立てた人物であることは、さまざまに指摘がある³⁰が、「菖蒲・あやめ草」が日本的な展開を成すにあたって、貫之という歌人が見出した歌ことばの世界の影響力ははかりしれないものだといえよう。「菖蒲・あやめ草」の表現の史的変遷の過程において、「長寿」を意味するものとして捉えている上の歌群は異彩を放っている。

小島憲之は著書『古今集以前』の中で和歌は漢詩の世界の影響のもとに表現されているとし、「歌の比喻表現は無意識のうちに詩の洗礼を受けた」と述べた³¹が、その大きな流れの中に先の『新撰万葉集』の歌も存在し、ひいては「逢坂越えぬ権中納言」の「君が代の」の歌も位置づけることができる。長寿をことほぐ 賀 の歌の中にはかろうじて留まることができたのだといえよう。

大陸の「菖蒲」から、日本の「菖蒲・あやめ草」へ、又奈良・平安時代にお

ける「あやめ草」の表現を追ってきたが、「菖蒲・あやめ草」をめぐる表現³²の史的変遷の一時期に、中国文学の影響を受けた「長寿」の賀歌が一瞬のきらめきのように生成した経緯を見出すことができたのではないだろうか。一瞬光って消えてしまうものではあったが、そこで出だされた〈根長き〉菖蒲・あやめ草の表現は、さまざまな詠みぶりへと発展し、平安時代における豊饒な歌ことばの世界を確立しえたのである。

おわりに

「長寿」といっても、日本と中国ではその内実に微妙な差があるのは留意せねばなるまい。即ち、日本の「長寿」は「若返る」ことではなく、文字通り「長く生きる」ことを尊しとする思想だということとはできないか。中国において「不老不死」がどれほど人々に冀求されたものであるかは、さまざまな文献に認めることができたが、日本において求められていたのは「不老」や「不死」などというものではなく、「長生」である。「長い根」を愛でる心性はそのことの表れであろう。「ちとせ」の「根」は長い時間の内在を示す。それは、死ななかつたり若返ったりするものではないが、〈長い根〉に命を重ねてみせた所に、日本人が求める「長寿」のあり方の一端をうかがうことができる。

このように考えると『竹取物語』の最後において「不死」の薬が燃やされることは象徴的だ。まさに「物語は「不死の薬」を焼くことによって死ぬべき人間の宿命をえらんだ。³³」のである。

永遠の命を手放したところに、「移ろいの美」や「無常観」といった日本的な美意識の萌芽があったように思う。先に「菊」について少し述べたが、その菊の花とても、「長寿」と関わらせて詠まれるのは重陽の節にまつわる場合であり、後代においては「うつる」「色変わりする」植物として愛でられるようになる³⁴。日本の美意識はゆるやかに死というものを受け入れるところに見出されたものであったのかもしれない。

以上

(注)

- ¹ 『芸文類聚』(刈谷村上文庫蔵)。
- ² 黒川洋一・入谷仙介・山本和義・横山弘・深澤一幸編『中国文学歳時記』同朋社出版 1989 年に詳しい。
- ³ 『荊楚歳時記』(平凡社 1978 年 東洋文庫 324)。
- ⁴ 三谷栄一「「根合」の民族とその意義」(『古典文学と民俗』岩崎美術社 1968 年)。
- ⁵ 『呂氏春秋』「冬至後五十七日菖始生、菖者百草之先生者」(有朋堂書店 1928 年 有朋堂文庫漢文叢書)。
- ⁶ 瀧澤精一郎「辟邪の植物 菖蒲と菊を主にして」(『野州国文』第 2 号 1968 年 10 月)
- ⁷ 山中裕『平安朝の年中行事』(塙書房 1972 年 塙選書 75)。
- ⁸ 『本朝月令』(『群書類従』巻第 81)。
- ⁹ 『続日本紀』の本文は新日本古典文学大系による。
- ¹⁰ 後藤祥子「五月五日」(山中裕・今井源衛編『年中行事の文芸学』弘文堂 1981 年所収)。
- ¹¹ 『古今要覧稿』の本文は『広文庫』「あやめ」の項からの引用による。
- ¹² 久徳高文「あやめぐさ考 万葉集・勅撰集における」(『金城国文』47 号 1971 年 6 月)
- ¹³ 和歌の引用本文は、『万葉集』は塙書房刊『万葉集 本文篇』により、私に表記を改めた。その他についてはすべて新編国歌大観による。
- ¹⁴ 片桐洋一「あやめぐさ」(『歌枕歌ことば辞典増補版』笠間書院 1999 年)。
- ¹⁵ 三浦國雄『不老不死という欲望 中国人の夢と実践』人文書院 2000 年。
- ¹⁶ 『新撰万葉集』の訓読は、半澤幹一・津田潔「『新撰万葉集』注釈稿」(『共立女子大学文芸学部紀要』43 号 1997 年 1 月)による。
- ¹⁷ 呉衛峯「和歌と漢詩の出会い 『新撰万葉集』における「あやめ草」と

「菖蒲」をめぐって 」（『文学・語学』156号1997年10月）

- ¹⁸ 泉紀子「『新撰万葉集』の世界 その場面性と口誦性 」（『王朝文学の本質と変容韻文編』和泉書院2001年）
- ¹⁹ 『文選』の本文は、高橋忠彦訳注『文選』（学習研究社1985年）による。
- ²⁰ 『列仙伝』「王子喬」には「王子喬者、周靈王太子晋也。＜中略＞至時、果乘白鶴駐山頭」とある（『鑑賞中国の古典9 列仙伝』角川書店1988年）
- ²¹ 前掲注16には「五月」と「鶴」の取り合わせについて、「現実の景色 ではなく、長寿や神仙といった概念」をあらわすものだとの指摘がある。
- ²² 前掲注13による。
- ²³ 井上満郎「王朝貴族と「不老不死」」（『古代・中世の政治と文化』思文閣出版1994年）
- ²⁴ 前掲注4による。
- ²⁵ 三谷氏は民俗学的立場から歌合の成立の前段階として、稲作儀礼に伴って、菖蒲のように生命力の強い植物の「根」に対する関心が予祝行事として貴族生活に取り入れられたとする見解を提示する。
- ²⁶ 長徳四年藤原公任（『赤染衛門集』による）永承五年、永承六年六条齋院禰子内親王根合、寛治七年郁芳門院根合。
- ²⁷ 片桐洋一「逢坂越えぬ権中納言の根合歌三首」（『文学』56号1988年2月）
- ²⁸ 新編国歌大観の検索には角川書店『新編国歌大観CD-ROM』を参考にした。
- ²⁹ 『拾遺集』0111 葦引の山郭公けふとてやあやめの草のねにたててなく、『能宣集』0299 あやめ草けふしもなかひきわかれたびねにひとのおもひたつらん、『紫式部集』0063 しのびつるねぞあらはるるあやめぐさけふまでかかるねはいかがみる など多数。
- ³⁰ 渡辺秀夫「紀貫之 うたことばの創造 」（『和歌文学講座4 古今集』勉誠社1993年。）

- ³¹ 小島憲之『古今集以前』(塙書房 1976年)。
- ³² 本論で取り上げた「表現史」は奈良から平安にかけての流れをたどることに重きを置いたため、平安期に成立する散文作品に触れることができなかった。散文の中における歌ことばも含めた「表現史」を視野に入れることについては今後の課題としたい。
- ³³ 高橋亨「竹取物語論」(『国語と国文学』1976年3月)。
- ³⁴ 「菊」については、今回は述べることができなかったが、別稿にて考察する。

